

# 教材を活かした道徳の授業づくり

## － バッドエンドの物語に注目して －

学籍番号 229312

氏名 青谷 葉奈

主指導教員 金光 靖樹

副指導教員 松永 尚子

### 1. 背景

小学校で平成30年から全面実施された「特別の教科 道徳」において、物語教材は、単なる読み物ではなく道徳的価値を考えさせるための手段にならなければならない。「考え、議論する道徳」の実現のためには、物語教材の分析・活用は重要な要素の一つである。

本研究は、「しあわせの王子」や「手品師」など良い行動をした主人公が損をするような物語が道徳の教材として採択されていることを筆者が疑問に思ったことが始まりである。頑張りが報われないというのは、読み手に少なからず衝撃を与え、負の強化につながりかねない。それにも関わらず、前述のような物語が広く採択されているのはそれだけの教育的価値があるからだろう。そこで、そのような物語を便宜上バッドエンドと呼び、ハッピーエンドでは代替できない特有の効果があると考えた。本研究では、実習校で実践研究授業が可能な学年段階に該当するバッドエンドの物語教材を詳しく分析することでその効果を明らかにし、それらを踏まえた授業を行い、バッドエンドの物語教材の活用法の一例とすることを目的とする。研究に際し、物語教材におけるバッドエンドの効果について考える手がかりとして、リクール解釈学の「疎隔と帰属」を用いた。

### 2. バッドエンドの物語の効果

疎隔と帰属は、リクールによる啓示の生成についての検討に関連する用語である。彼は啓示を、疎隔の状態を経由して、これまでにその個人が持っていなかった何らかの新しい価値観を採用すること（新しい価値に帰属すること）によって発生するものとした。同様のことは物語を読んだ時にも発生し、この場合疎隔とは、テキストを読む行為によって個人個人が信じている価値観から引き離されることを意味する。読者は疎隔が起こることで初めて、自らが帰属している価値観を検討すべきだと気づく。変化せず元の価値観に帰属し直したとしても、その価値観は以前までとは質的に変化しているため、疎隔は読者の価値観をより高次の段階へと導くものだと言える。そして、バッドエンドの物語にはその構成上、読者の価値観を疑似的に失敗させる。妥当性のある可能的現実（日常的現実とはいくつかの点で異なるが論理的には充分考えることができるような他の世界。物語世界を含む）の失敗は、言わば警鐘として読者に強く訴えかける。結末を見届けた時、読者は「そしてそれから？」といった問いの代わりに、「なぜ？」と問うのである。つまり、疎隔それ自体は物語であれば結末に関係なく起こるが、バッドエンドのように隠喩的に解釈すべきで、かつ日常的現実との対比が明確である物語の方が疎隔の衝撃が強くなるのである。また、疎隔の後に起こる帰属のあり方には、他律的か自律的かという違いがある。この違いは物語における誘導路の有無によって起こり、自律的な帰属には

感情的な帰属と理性的な帰属の2種類を含む。帰属するにあたっては、誘導路や文脈、自らの価値観を手がかりとして物語を解釈する必要がある。

### 3. 研究授業の概要

#### 3.1 授業の意義

授業教材は、株式会社学研教育みらい版「みんなの道德4年」に収録されている「泣いた赤おに」を用いた。授業のねらいは、内容項目におけるB「友情と信頼」と関連させた。本教材は、感動を契機とする感情的な帰属が起こる物語である。疎隔が優れているのは価値観の組み換えが自然と行われることである。疎隔は距離を取ることであり、自己の既存の価値観を真っ向から否定するものではない。バッドエンドなのに感動するのはどうしてかという問いかけは、「感動したもう一人の自分」を客観視することに繋がる。この思考はメタ認知能力が育っていなくても十分に可能であり、その解釈を通して価値観は変化していく。これは価値観の理性的な葛藤とは全く異なるものである。つまり、登場人物の行動の是非や道徳的価値観を評価するような極めて理性的な考察ではなく、感動を契機とした自己の客観的な理解をさせられるという点において、本教材を扱う意義がある。

#### 3.2 授業実践

授業は、5年生の全クラスで行った。授業を行うたびに省察し、発問やワークシートの内容に変更を加えながら次に繋げていった。授業においては、解決策を探ることは重要ではないため「赤おにはどうすればよかったのか」というような代替案を考える発問は避け、バッドエンドによって児童が感動を契機として友情について考えなおし、他者と考えを交流する中で考えを深め、より高次の価値観に帰属することを目指し、さらにはそれを教員として見取ることを目指した。また、本授業の評価は、ルーブリックを作成し、ワークシートの記述を基に行った。

### 4. 考察

研究授業から、本研究の目的であるバッドエンド教材の活用については一定のメリットがあることが分かった。すなわち、バッドエンドであることを意識した授業展開によって児童の中で疎隔が起こり、物語への感動を解釈の手がかりとして帰属が起こっていることが確認できた。メタ認知能力が育っていない段階であっても、バッドエンドに反応した自分の心の動きを説明しようとすることで、自分自身を客観的に理解することに繋がっている。おにの友情についての考えは、授業を通して見つめなおした児童それぞれの友情観が表現されている。

また、ルーブリックの最も高い評価4に該当する意見を共有することで、評価3の児童が評価4に近づく契機になりうることも分かった。したがって、バッドエンド教材を活かすには、結末によって起こった疎隔を的確に見極め、児童に自分自身の心の動きを基に解釈させながら、他者と意見交流をさせ、既存の価値観とは質的に向上している価値観に帰属させることを念頭に置いた授業を行うことが重要であると言える。